

〈インタビュー〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

聞き手 瀬 崎 圭 二

【寺山氏の記憶】

——よろしくお願いいたします。今日は、谷川さんが親しく付き合っておられた寺山修司さんのテレビの仕事について、お二人に共通する部分、お二人が交わっていく部分を中心にお話をお伺いしたいと思います。寺山さんの年譜を見たり、評伝を読んだりすると、寺山さんを放送業界に誘われたのは谷川さんだということがよく書かれています。まずは寺山さんのテレビの仕事について、谷川さんのご記憶にあることをお聞かせいただければ、と思います。

谷川 寺山が脚本を書いた「Q」（KR 一九六〇年一〇月三十一日放送）というテレビドラマを見て、批評したのを覚えてますけどね。とにかく、彼が病気で、病院にいる頃から付き合いが始まったんだけど、僕は兄貴分的な気分だったんですね。彼は病気だし、一人

だし、金がないって言って、食わなきゃいけないって言ってたから、仕事を探そうと思って、当時ラジオでディレクターたちと付き合いがあったから、まずラジオの仕事を彼に回したんですね。二人で草笛光子の「光子の窓」（NTV 一九五八年〜六〇年放送）っていう番組を一晚で何十回か書きちゃったりね（笑）。そういう形で誘ってたら、あつという間に彼の方がラジオドラマで民放の賞なんかもらって。だから、完全にラジオの世界では追い越されたみたいな感じがしてましたね。彼が芝居を始めてから、僕はあんまり彼の芝居、演劇っていうのが肌に合わなかったんで、あまり見てなかったんですね。彼の場合もドラマが実生活に根付いてないっていうのかな。そういう感じがすごくして、それは彼の私生活を知ってたということもあるんですけどね。土俗的なものに対する興味っていうかな、そういうものがあるのをよく分かってたし、僕はそういう



谷川俊太郎氏

ものどちよつと違う世界に住んでたところもあってね。——それは、谷川さんと寺山さんの子供時代の生活環境の違いということもあるんでしょうね。

谷川 生活環境というよりも母親との関係でしょうね、簡単に言えば。あの母子関係ってというのは独特の関係でしたからね。僕はわりと

母親に愛されて、幸せな幼年時代を送ってるわけですから。そこらへんが彼と違うところでしょうね。寺山とラジオとの関係について言えば、当時ラジオの世界で、生の人の声を台本なしのアドリブで録音して、それを編集していく録音構成というのがあったんだけれども、それで寺山はけっこう面白いもん作ってましたよ。最初から方法的にはすごく新鮮なものをやりましたよね。逆に言うと、彼の演劇、テレビドラマもそうなんだけど、台詞があんまり面白くなかったんですね、自分にとっては。台詞にドラマを感じなかった。面白い表現がいっぱいあるんだけど……。

——でも、谷川さんと寺山さんとはずっとお付き合いがあたりですよ。ね。

谷川 彼が忙しくなって、よく海外なんか出かけている頃は、ときどき会って愚痴を聞くくらいだったんだけど。二度ばかり外国で会って、外国で会ったときの方が向こうも時間に余裕があるしね。それはよく覚えてますけどね。パリで会って、フランクフルトで会ったのかな。本当に付き合いが元に戻って深くなったのは、彼が病気になるからですね。僕のいとこが主治医になって、近くの病院に入院したりして、そこで死んだわけだけども。

【若い日本の会】

——今のお話をもう少し細かくお尋ねしていきたいと思います。谷川さんが寺山さんを放送業界に誘われたわけですが、谷川さんと寺山さんとの出会いは、早稲田大学の「緑の詩祭」で上演されていた寺山さんの「忘れた領分」を谷川さんがご覧になって、寺山さんを訪ねていかれたことがきっかけだそうですね。その「忘れた領分」を『権詩劇作品集』（的場書房 一九五七年）の掲載に誘ったのも谷川さんであるという話も聞いています。谷川さんが編集委員を務めておられた当時のテレビドラマ専門誌『テレビドラマ』の誌面にも、一九六〇年頃から寺山さんが登場し始めますが、『テレビドラ

マ』に誘われたのも谷川さんのですか？

谷川 いや、テレビ界には僕は誘わないで、彼はラジオでどんどん仕事していったんで、テレビの人が目を付けて書かせようとし始めたんじゃないかな。でも、TBSの萩元晴彦さんたちとは、寺山は、遊び仲間みたいなどころがあつてね。なんか仕事を離れた変な集団があつたんですよ。そういうのに寺山もちょっと触れてたような気がするな。萩元さんがとにかく遊び人的感じの人でね、関西にちょっと遊び人みたいな人たちのグループがあつて、そんなところに寺山もちょっと誘われてたんじゃないかと思うのね。当時のテレビはそんなにきちんとした仕事じゃなくて、なんか一緒に付き合っている間にやろうよ、みたいな感じで仕事ができてた時代なんですよ。ね。

——その雰囲気は、後に萩元さんとテレビマンユニオンを立ち上げる今野勉さんの『テレビの青春』（NTT出版 二〇〇九年）を読むとよく分かりますね。本当に毎晩遊び歩いているような感じでテレビ番組をつくっておられます（笑）。

谷川 そう。何となく当時のテレビ業界はやくざな雰囲気がありましたね。僕は、テレビマンユニオン時代の今野さんと三本ほどドキュメンタリー番組を一緒につくったんだけど、ドキュメンタリー作家としての今野さんのことはすごく信頼してましたね。

〈インタビュアー〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

——お二人が放送業界にかかわられた頃のことですが、谷川さんがラジオの仕事を始められた頃に、「若い日本の会」というものにかわっておられますよね？ 谷川さんがこういう会に入っているというの少し意外な感じがします。

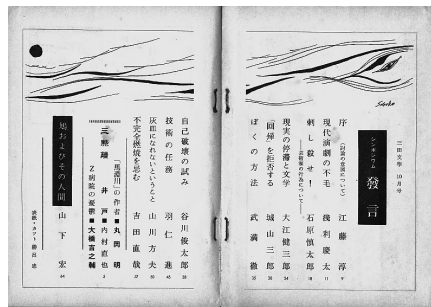
谷川 そうですよ。あれは、ほとんど友人関係で入ってるんですけど。自分に何かイデオロギーがあつて、警職法や安保の改正に反対したっていうよりも、武満徹もいれば、僕がちよっと前に知ってた石原慎太郎もいれば、江藤淳もいれば、ということ、そういう若い人間たちが一種の会をつくるのもエネルギーになるのかなという感じで入ってたんですよ。

——調べたところ、谷川さんが会の名前をつけたということらしいのですが。

谷川 そうかもしれない。よく覚えていません。

——その「若い日本の会」のメンバーでシンポジウムが行われています。その様子が『三田文学』（一九五九年一〇〜十一月）に掲載され、河出書房新社から本としても出版されています。友人関係から「若い日本の会」に参加されたということなんですが、谷川さんの発言を見ると、結婚や奥様のことなど、生活のことを重要視して語ってらっしゃるといふような印象があります。

谷川 みんなとにかくこういう公の発言になると、自分の生活に根



『三田文学』（1959年10月）目次

ざしているのかどうか分からない、ある意味抽象的なことばかりしやべるわけですよ。それが自分にとっては何か不満でね。僕は仕事よりも、自分のプライベートな生活の方が基本だという立場でずっとやってきて、詩も何かそういう生活に根ざしていないとダメだと思ってきましたから。シン

ボジウムでもみんなけっこう

ポジウムでもみんなけっこう

メだと思ってきましたから。シン

ボジウムでもみんなけっこう

ポジウムでもみんなけっこう

メだと思ってきましたから。シン

ボジウムでもみんなけっこう

ポジウムでもみんなけっこう

メだと思ってきましたから。シン

ボジウムでもみんなけっこう

ポジウムでもみんなけっこう

メだと思ってきましたから。シン

ボジウムでもみんなけっこう

つたなという感じがします（笑）。石原慎太郎さんと大江健三郎さんが一緒に行動するというのも、今では考えられないですね。石原さんはこのシンボジウムでもすごく過激な発言をしてらっしゃいますし……

谷川 ほんと、よく一緒にやりましたよね（笑）。

——ただ、私の目から見て面白いなと思うのは、このシンボジウムに参加したメンバーのほとんどが、テレビドラマやテレビドキュメンタリーにかかわっているってことなんですよ。

谷川 ああ、そうかもしれないですね。

——実際に、江藤さんの提案だったと思うんですが、この会から、テレビ番組をつくらうという発想が出てきますよね。それが日本教育テレビ（NET）の「半常識の眼」というシリーズ番組で、そこで放送されたのが、谷川さんのテレビドラマ「部屋」（NET 一九五九年三月三〇日放送）ですよ。それは、やはり、会の中でテレビというメディアを活用しているという考えがあったんですか？

谷川 いえいえ、確かテレビ局の方から声がかかったんだと思います。僕の記憶では、若い面白そうな連中が何かやってるから、番組つくらせてやろうということだったと思います。

——江藤さんが参加した座談会「統一の芽をどう育てるか」（『世

難しいことや観念的なこと言うわけじゃないですか（笑）。自分が実行もしていないのにね、なんか行動を促す発言をするようなことはおかしいと思っただけなことがありましたね。だから、自分はできるだけ足に地がついたようなことを言いたいと思っただけじゃないかな。

——でも、会に参加されているということは、当時の警職法や安保の改正にはやはり反対の立場であったということですよ？

谷川 なんかあまりにもひどいなあということも思っていましたよ。

——今から見ると、よくこういうメンバーが会に集まって一緒にや

界」一九五九年一月）での発言の中に、「若い日本の会」のメンバーで、例えばテレビドラマをつくったりもできるんじゃないか、というのがあるんですが。

谷川 ああ本当？　じゃあ、会の側にもそういう意向があったんだね。

——寺山さんちよつと後から「若い日本の会」に入ってらっしゃるんですが、これも谷川さんのお誘いですか？

谷川 確かそうだったと思います。

——それで、お二人は会に入ってはおられるんですけども、他のメンバーとあまり肌が合わなかったというようなこともあったと聞いています。

谷川 そう、合わなくて（笑）。みんなが集まってる時なのに、寺山と二人で抜け出しちゃったみたいなきともありましたね。

——やはり、谷川さんから見て、他の方が生活に根ざしていない感じがしたところが合わなかった原因なのでしょうかね？

谷川 それを言えば、寺山なんかあんまり生活に根ざしていないわけだし（笑）。つまり、できあがる作品よりも、自分のイデオロギーとか、思想とかというものを大事にしている連中と馬が合わなかったという感じを僕は持つてるんですけどもね。

——それは、やはりご自身が詩人であり、詩を書いてらっしゃると

〈インタビュー〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

いうことと関連はしますか？

谷川 うん、それもありませんでした。確かそういうことをシンポジウムでしゃべったと思うんだけど、もともと寺山も詩人みたいなところがあるわけでしょうか？　僕はもちろん詩一本で来ているわけだから、散文作家とか演劇の演出家とか、ジャーナリストイックな活動している人たちとかと、何か馬が合わない二人とも思って、抜け出しちゃった記憶があるんですよ。結局は、各々のメンバーの人となりみたいところでね、合わないと思ったんですよ。

——人となりですか（笑）。これもどこかで谷川さんがおっしゃっておられたことですけれども、意外に石原慎太郎さんとは馬が合ったということを読んだ記憶があります。

谷川 僕、石原、好きなんですよね。以前、思想、信条が全然違う人間と友達になれるかってことを文章に書いたことがあるんだけど、僕は、それは友達になれると思ってるんですよ。

——どういうところが石原さんの魅力として、谷川さんの目に映りましたか？

谷川 男っぽいくせに気が弱いとか、そういうところですね（笑）。彼は口では言うんだけど、そういう言い方も威圧的じゃなくて、言っているのかなあって感じで言ったりする、そういう一種の繊細さがあったね。それから彼の短編小説で好きなものもありましたし

〈インタビュ〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

二二六

ね。それから、車好きっていう共通点とかね（笑）。そのへんですよね。あと、あの種の友達が僕にはほとんどいなかったからね。彼は、わりとスポーツマインドの人でしょう？僕は全然スポーツはダメだしね。彼に誘われて、僕はヨットに乗せてもらったりね。クレー射撃にも誘われてね。そういう友達にはいなかったから、ある意味貴重な存在だったわけ。そのときに誘われて、じゃあ行きたくない、行ってみようっていうような人柄なんですよ、石原は。ちよつとでも嫌だったら行かないじゃないですか？（笑）でも、石原に誘われたんだつたら行ってみようっていうふうに思わせる人柄があつたんだよね。

——寺山さんの一九六〇年頃のものを読んでいくと、寺山さんも石原さんに影響を受けてるのかなって思われるものがいくつか見られます。

谷川 それはそうかもね。みんな同時代の人たちで、もちろん好きな作家の影響は受けるでしょうね。日本だけじゃなくてね、外国の作家でも。石原なんか、明らかにヘミングウェイの影響なんか受けてると思うけど。

【当時影響を受けていたもの】

——寺山さんの最初の頃のラジオドラマ、例えば「ジオノ・飛ばな

かった男」（RKB 久野浩平演出 一九五八年一〇月一四日放送）、
「中村二郎」（RKB 久野浩平演出 一九五九年二月一〇日放送）
を聴いてみますと、すごくファンタジックなんですよ。その翌年、
一九六〇年の寺山さんのラジオドラマに「大人狩り」（RKB 小
部正敏演出 一九六〇年二月八日放送）という作品があつて、「大
人狩り」を聴いた後、寺山さんの『家出のすすめ』（角川文庫 一
九七二年）を読んでいくと、ジャック・プレヴェールの「子ども狩
り」というシャンソンの歌詞が引用されていて、こういうところか
らタイトルを発想したんだろうなと思いました。今年、岩波文庫か
ら『プレヴェール詩集』が刊行されて、それをめくると、谷川さん
が昔『ユリイカ』に書かれた文章が解説文として収録されていまし
た。おそらく、プレヴェールという作家の影響力が、谷川さんと寺
山さんの両方にあつたのかなと思われまます。

谷川 でしょうね。僕には非常に強い影響力がありましたね。寺山
の場合は、いろんな人の影響を受けて、それを自分のものにする
という才能があつた人だからね。もちろん、プレヴェールだけじゃな
くてね。もつと僕よりたくさんさんの人の影響を受けてると思うけど。
プレヴェールは、僕は詩を書く上で、詩のベストセラーをつくりた
いと思つた原因になつた詩人です。プレヴェールの『パロール』と
いう詩集は、当時百万部売れたと言われていたので（笑）、僕もそ

ういうふうになりたいと思ったのは確かなんですよね。「天井桟敷の人々」(マルセル・カルネ監督 一九五二年二月二〇日本公開)とか、映画の脚本も素晴らしかったからねえ。寺山は、プレヴェールが脚本を書いた映画の影響を受けてると思う。

——当時、プレヴェールの翻訳ってたくさん出てなかったと思うんですが、谷川さんも寺山さんも翻訳以前に読んでおられたんですか？

谷川 いえいえ。僕はフランス語読めないから、ユリイカから出版された小笠原豊樹訳のプレヴェール詩集の影響ですね。

——一九五〇年代後半のものでしたよね？

谷川 そうでしたね。その訳が決定的に良くて、後の人の訳は、僕はあんまり気に入らないという気持ちがあつたとあるんですけどね。

——このあたりの当時の外国作家の影響というのが、私にはなかなか見えてこないところがあつて、プレヴェールも含めて、谷川さんも海外のものをたくさん取り込んでらしたわけですね。

谷川 いや、たくさんは取り込めませんよ。つまり、自分が好きな人ってそんなにたくさんはいないわけじゃないですか。そういう人たちは好きだから、影響があつたんじゃないかとかわりと言えらるるんだけど、そうじゃないもの、つまり無意識に影響を受けているものはいっぱいあるわけですからね。本だけじゃなくて。僕なんかは音

〈インタビュー〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

楽の影響がすごく強いと思ってるんですよ。簡単に言えば、クラシックがメインですね。ただ、その当時はある程度シャンソンっていうものに影響されてますよね。あれはことが割と主なものだったから。もちろん翻訳を通してね。でも、翻訳で読んで、日本語で読んで歌を聴けば、同じような意味のことをフランス語で言ってるんだけど、何となく日本語の歌詞の歌になつてると感じて聴けるわけだから。そういうのは、歌の作詞だけじゃなくて、何か詩そのものにも影響を受けてると思うな。それは寺山もたぶん同じだと思うんですよ。

——文学の研究者は、小説とか詩とか文学作品しか見ないところがあるんですけども、当然のことながら、文学と文学との間の影響関係からのみ作品が成立していくわけじゃないですよ。映画やジャンソンといったいろんな文化から影響を受けて、ものがつくられていくところがあるわけですよ。

谷川 例えば、パチンコが好きで作家の作品は、パチンコに影響を受けてると思いますね(笑)。ただ、それは言語化しにくいんだよね。一つの作品のこの部分がパチンコの影響だとは言えないでしょう？(笑)だから、実証が難しいですよ。

【寺山氏の土俗性】

——これは、谷川さんが脚本を担当したテレビドラマともつながってくる問題だと思うんですが、一九六二年頃から寺山さんの作品が土俗的な雰囲気帯びてくるようになります。ラジオの「恐山」(NHK 庄子茂演出 一九六二年八月五日放送)や、テレビドラマの「田園に死す」(NTV せんぼんよしこ演出 一九六二年一〇月二二日放送)とかですね。こういう土俗性も、決して寺山さんだけの表現ではなくて、例えば、一九六二年頃に、恐山を訪れるということが一種のブームになっていて、「恐山ブーム」のようなものがあったようです。日本各地の様々な習俗を発見していくという認識の枠組みみたいなものがあったて、例えば、もうちょっとさかのぼると、深沢七郎さんの『橋山節考』(中央公論社 一九五七年)のような本が流行ったりするようなこともあります。そのような動きは、テレビの番組制作ともかかわっていて、地方局がどんどんできあがっていくと、地方の文化、習俗が伝えられるようになってくるわけですよ。それで、そういうネットワークができていく中で、寺山さんも恐山の雰囲気を利用してラジオの番組をつくってやろうという発想になってくると思うんですよ。

谷川 彼は何しろ出身が東北ですからね。彼がつくると、ちょっと

自然な感じはやはりあるんですよ。

——谷川さんが脚本を担当したテレビドラマ「ムツクリを吹く女」(HBC 森開逞次演出 一九六一年一月二二日放送)や「祭」(HBC 森開逞次演出 一九六二年一〇月二六日放送)も、大きく見ると、そういう流れの中に位置づけられるのかなと思うんですね。これらも、高度経済成長の中で衰退していく北海道の文化を扱ったものでした。

谷川 自分の中にはそういう考えがないんだけど、外から見ても思われても全然かまわないという感じですね(笑)。あれは、森開逞次さんという北海道放送のディレクターがいたから出来たものであってね。まあ、アイヌのユーカラとか、民俗や文化というものにはある程度の興味はもちろんあったわけですけどもね。だけど、森開さんがいなかったら、自分からそういうものを書くこととはたぶん思っただけだったと思うね。

——これは私の考えなんですけど、たぶん谷川さんには、東京から北海道を見るまなざしというのが、そうしたテレビドラマをつくるのに出来上がっていると思うんですよ。一方、寺山さんの場合は、東京が青森をどんなふうに見るのか、恐山をどんなふうに見るのかを分かった上で、それをうまく演出に使うということがあるのかなと思います。

谷川 彼がいくら東北を舞台とするものを書いて、それが私小説的なものとは思えないんですね。全部フィクション、想像力の世界だっただけを感じるのね。でも、その一番もとの、彼が終生変わらなかつた部分、例えば、しゃべることに訛りが残っているわけだから、生まれた地というものにはやはり何かあるんだろうと思うんですね。で、自分にはそういうものが全然なくて、完全に共通語の世界から東北とか北海道を見てきたことは明らかなんですよね。だから、自分の中にはあんまりローカルなものという意識がなかつたですね。みんな同じだろうって感じて見ていました。

——テレビを通じて、全国に映像が波及することによって、地方の習俗が取り上げられていって、その流れの中に寺山さんの映像表現や演劇の表現が生まれてくるようにも思います。

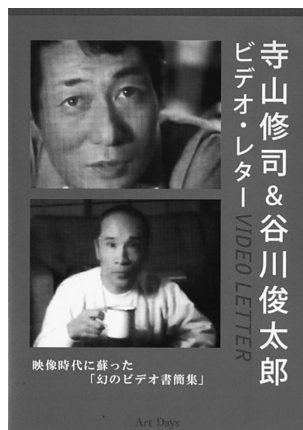
谷川 うーん、寺山の場合はもうちよつとそこところが、テレビとかラジオにかかわる以前からあつたものだというふうには思いませんね。でも、確かに、地方局が自主的に番組をつくるようになったのも、その頃かな。それで芸術祭に参加したりね。そういうことの影響もあるよね、きっと。

——お二人がテレビの仕事を始められたときは、ちょうど高度経済成長期に重なっているんで、若年層が地方から都市部に移動していく時期でもありますよね。そのことが、寺山さんが受け入れられて

いく土壤のようなものをつくっているのかなというふうにも思います。寺山さんの母親を殺すというモチーフも、当然、集団就職とかで親を置いて地方から東京に上京するような状況の中で、物語が受け入れられていくようなところがあると思います。寺山さんの場合、そのような大衆的な感覚をうまく利用するような発想があるのかなと考えています。

【ビデオ・レター】

——最後に、谷川さんと寺山さんが、寺山さんの晩年に取り交わされたビデオ・レターについてお伺いしたいと思います。私はDVD（アートデイズ 二〇〇九年）化されたものを見たんですが、これがすごく面白くて、何が面白いかと言うと、谷川さんが脚本を書かれた「あなたは誰でしょう」（NHK 和田勉演出 一九六一年四月二九日放送）というテレビドラマと、寺山さんのテレビドキュメンタリー「あなたは……」（TBS 萩元晴彦・村木良彦演出 一九六六年一月二〇日放送）とが、このビデオ・レターにかかわってくると思うんですね。例えば、谷川さんのつくった映像の中で、谷川さんがどんだん服を脱いでいく映像がありますよね？ これが目白くて（笑）。これってどんだん自分の所有物を投げ出して行って、自分自身を問いかけていくわけですよね。その一方で、映って



『寺山修司&谷川俊太郎 ビデオ・レター』（アートデイズ 2009年）

ないんだけど、映ってないところに、おそらく全裸の谷川さんがいるにちがいないみたいだな（笑）。そういう、表現されているものと、表現されていないものとのところで、自己の存在というものが問いかけられたり、揺らいだりしているわけですよ。谷川さん自身も、「これは私の詩ですか？」と最後に問いかけてたですよ。この映像には、当然ユーモアも入ってると思うんですけども、そういう全てが「あなたは誰でしょう」ともつながってくると思いました。それを受けて、寺山さんがまた自分の身分証明書とかそういうものをずらっと並べて自己の存在を映像で表現していったりしますよね。あれも、谷川さんの「あなたは誰でしょう」の表現と同じものだと思うんですけども、そういうところに自己の存在を問うモチーフが表れていると思います。このビデオ・レター、

最初のことばについてのわりと真面目な映像から始まっていったかと思うんですが、谷川さんがいろんな表情をして最後に「ミントヒー」って言う映像あるでしょう？ 私、これ見て爆笑してしまっただんですが、このあたりからだんだん崩れていきますよね？（笑）谷川 寺山もそうなんだけれど、僕は見る人をすごく意識する人間だから、楽しませなきゃいけないって気があるんですよ（笑）。受けたがりなんです。受けたいわけ（笑）。それも、寺山が、病に真面目にやってるんだけど、ちょっと息苦しいから、この辺で自分のアイデンティティみたいなものをどういうふうにやるのかちょっと刺激してみようという気がしてやった記憶がありますね。寺山の受け方はわりと平凡だったんで、ちょっとね、がっかりした（笑）。

——寺山さんは寺山さんで、都内で不特定多数の人にいろいろな質問をぶつけていった「あなたは……」という番組と同じ形式で、「谷川俊太郎って誰ですか？」とか「値段にするといくらぐらいですか？」とかって、いろんな人に質問をしていますよね？（笑）面白かったのは、寺山さんが、犬にも同じ質問をしている映像です。谷川 あっちの方が面白かったな（笑）。ああいうところが彼のアイデアなんです。やっぱり受けねらいみたいところがある

わけ、どこかに（笑）。

——でも、これ、もうちょっとと真面目に考えていくと、谷川さんの場合は、最初の詩集の『二十億光年の孤独』（創元社 一九五二年）で、宇宙空間の中で自己の存在を問い直したりしていくようなことと「あなたは誰でしょう」とはやっぱりつながっていると思いますし、ビデオ・レターで谷川さんが服を脱いでいく映像表現もつながっていると思うんですね。寺山さんの場合も、「あなたは……」の中でいろいろな質問をしていく形式で、「大衆」ということばの中に埋もれがちな一人一人の自己を映し出していくことが、ビデオ・レターの映像の中でパロディ化されているところがあると思います。

谷川 うん、つながってますね。寺山の方が、相手のアイデンティティを問う方に向かって、僕はやっぱり自分の方に戻っていく間の方をしていると思ってるね。寺山は、わりと親しい間柄の自分から見てても、彼は一体何者かみたいなことが、疑問としてあったんだよね。日常的なつきあいの中では、なんか背が高く、訛りがあるって、なんかすごい有名になりたがり、みたいなものがあるんだけど、彼の書いているものから寺山修司っていうのはなかなか捉えにくいんです。それは、要するに彼が全てフィクション化してるところがあって、それで抽象化もしてるところがあって、そういうところ

ところに僕はなんかもどかしさを感じてたのね。で、彼が病気になるって、僕のいとこが主治医でね、彼の病気を診てくれたんだけど、彼が初めて自分というものを、肉体を通してアイデンティファイセざるを得なくなったということに、僕はすごく期待してたんですよ。だから、寺山が死なないで、もうちょっと病氣と付き合って、今まで追究したことのない、身体ぐるみの自分というものを書いていったら、また作風が違ってくるんじゃないかなって思ったんですけどね。

——それが、このビデオ・レターの背景にもあったわけですか……。
谷川 もう彼の晩年ですからね。なんか一種のもどかしさがありました。そのビデオ・レターには全然出てこないんですけども、僕のいとこの主治医と寺山と僕と、九條今日子さんもいたかな、料理屋みたいなところでね、彼が「さらば箱舟」（寺山修司監督 一九八四年九月八日公開）を撮っているときに、彼がどこまでロケーションに付き合えるかっていうのを主治医と相談したことがあるのね。そのときに僕のいとこの主治医が、彼にけっこう迫ったわけですよ。彼はやっぱり自分の状態を受け切れてなかったって感じがするのね。もしかしたらもうすぐ死ぬかもしれないみたいな状態をね。で、本当はそれを僕はビデオで撮ってたんだけど、そのビデオがどこ行ったか分かんないんですけどね。それは相当緊迫した場面だったん

〈インタビュー〉谷川俊太郎氏に聞く「寺山修司とテレビ」

一三二

ですよ。寺山をそこまで追い詰めちゃって、僕はかわいそうだなって思ったんだけど。そのいとも死んじやったし、ちよつともう思い出しようがないんですけどね。最後の彼のことは、「私の墓は、私のことばであれば、充分」でしたよね。そこまで彼は追い詰められたってことがあるんだけど、それも一種の美辞麗句ですよ。非常に公的な言い方をしたいと思いますね、自分のことばが自分の墓だつていうのは。うまいからね、とつてもね。本当に彼の死への恐怖とか不安とかつていうものが出てないみたいな感じがあるのね。生身だつたらある程度もちろん出てるんですけどね。

——『読売新聞』（夕刊 一九八三年七月四日、一九八六年二月二四日）に報じられていますが、このビデオ・レターは、寺山さんの追悼上映会や、ニューヨークの近代美術館での日本のビデオ・アート展に出品されてますよね？

谷川 そうだったかもしれない。それは、かわなかのぶひろさんつていう映像作家の発案で始めたものだから。そこから機材なんかも寺山は借りてたんじゃあないかな。少なくとも僕がやろうつて言ったわけじゃなかったと思います。

——寺山さんが亡くなられた後、谷川さんがつくられた映像に、寺山さんの心電図の波形が映ります。

谷川 あれは、いところが主治医だったから撮れたんですよ。寺山

もそうだけど、武満徹とか、この間の大岡信とか、同世代の人たちをけつこう見送つてきましたね。

〔付記〕この記録は、二〇一七年五月二十七日、九月一五日に谷川俊太郎氏宅で行ったインタビューから、谷川氏の了解を得て、寺山修司氏についての談話を取り出し、編集したものである。インタビューは、拙論「一九六〇年代初頭における寺山修司とテレビ―政治・土俗・大衆―」（『人文学』二〇一七年一月）での考察をもとに行っている。こちらも併せてご覧いただければ幸いである。二度にわたるインタビューでは、谷川氏ご本人とテレビとのかかわりについてのお話もお伺いしているが、それについては別の場で公表したいと考えている。

インタビューに際してはナナロク社の川口恵子氏にお世話になった。記して御礼申し上げたい。なお、本稿はJSPS科研費（課題番号17K02472）における研究成果の一部である。